「神の選び」

イザヤ書

京都秋期特別集会　第１回　１９７７年１１月２６日（於大和屋旅館）

小池辰雄

# 【見出し】

【イザヤ19】

24その日イスラエルはエジプトとアツスリヤとを共にし三つあいならび地のうえにてをうくる者となるべし。25万軍のエホバこれを祝して言いたまわく わが民なるエジプトわが手のなるアツスリヤわが産業なるイスラエルはいなるかな。

【イザヤ40】

１なんじらの神いいたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。２ろにエルサレムに語り之によばわり告げよ。その服役の期すでに終り、そのすでにされたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと。

【イザヤ42】

１わがくるわが僕わが心よろこぶわがをみよ。我わがをかれにあたえたり。かれに道をしめすべし。２かれは叫ぶことなく 声をあぐることなく その声をにきこえしめず、３まためるをおることなく ほのくらきをけすことなく をもて道をしめさん。４かれは衰えずせずして道を地にたておわらん。もろもろの島はそのをまちのぞむべし。５天をつくりてこれをのべ 地とそのうえのとをひらき そのうえの民に息をあたえ その中をあゆむものにをあたえたもう。神エホバかく言い給う。

【イザヤ43】

１ヤコブよ なんじを創造せるエホバいまいい給う。イスラエルよ 汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ 我なんじをえり。我なんじの名をよべり 汝はわがなり。…… ４われてなんじを宝とし尊きものとして亦なんじを愛す。この故にわれ人をもてなんじにかえ 民をなんじの命にかえん。

【イザヤ44】

1されどわが僕ヤコブよわがみたるイスラエルよ今きけ 2なんじを創造し なんじをにつくり又なんじを助くるエホバいいたもう わがしもベヤコブよわが撰みたるヱシュルンよおそるるなかれ 3われ渇けるものに水をそそぎ たる地に流れをそそぎ わがをなんじのにそそぎ わがをなんじのにあたうべければなり…… 6エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの万軍のエホバ如此いいたもう われはなりわれはなり われのに神あることなし

# ●旧約の福音

イザヤ書は６６章から成り立っている。聖書全巻６６書の縮図とも言いたい素晴らしい預言書です。１～３９章、４０～５５章、５６～６６章の三つに大きく区分できる。

そのうち１～３９章が第一イザヤと言われ、預言者イザヤの書です。紀前７４０年頃から７０１年頃の４０年間、ユダのウジア王の歿っした時からアッシリヤの王センナケリブがエルサレムを攻撃した時までの預言者です。センナケリブはイザヤの信仰の力に負けて退いた。そういった偉大な信仰を以て貫いた預言者です。第一イザヤは正に信の預言者です。神を「イスラエルの」と言っている。

次に第二イザヤについて申すならば、北イスラエルは紀前７２１年にアッシリヤに亡ぼされてしまう。南ユダが亡びたのは紀前５８６年。その時の預言者はエレミヤです。エルサレムの主な人たちがバビロニヤに捕囚された。これがバビロニヤ捕囚。それが半世紀にわたる。その時の信仰の指導者としては預言者エゼキエルというのがいる。バビロニヤがアッシリヤを亡ぼし、バビロニヤはペルシャに亡ぼされる。ペルシャの王キュロスがペルシャ王国を立て、紀前５３８年頃、バビロニヤに捕囚されたエルサレムの人々をエルサレムへ帰還させる。その頃に現われた預言者が、「偉大なる知られざる者」といわれる第二イザヤである。多分、イザヤかエレミヤの弟子であったろうと思われる。第一イザヤの３４、３５章は第二イザヤの筆ではなかろうかと考えられます。第二イザヤがイザヤ書の中で一番中心になる所で、旧約聖書に於ても最深最高の所です。深淵の如く深く、また高峯の如く高い。これは正に旧約の福音です。全部これは詩文です。預言者の文態は大方、詩文なんです。大風の如く怒濤のごとく響いてくる。バッハ、ベートーヴェンの音楽だね。論理じゃない。神の言は音楽的です。しかもそれはドラマティック（劇的）なものです。

第三イザヤというのはどういうのかというと、エズラ、ネヘミヤという預言者的な祭司がいました。エルサレムの神殿がこわされたので、帰って来て神殿を再建することになった。その神殿を建て直す預言者的祭司として働いたのがネヘミヤという祭司。第二神殿が建ったのは紀前５１５年。ところで、エズラというのは祭司的な宗教改革をやりました。エズラの宗教改革は紀前４４４年。その５１５年から４４４年の間が、第三イザヤの歴史的な背景になっている。神殿宗教だけれども、まだ硬化現象を起こしていない。そこには預言者的な精神が生きていました。筆者は多分、第二イザヤの弟子、だからイザヤの孫弟子といっていいような人が書いたわけです。

全イザヤ書は旧約の福音です。非常に壮大雄偉なる文章であります。聖書が語っている神の言はどのようなことになっても亡びない。

「８草はかれ花はしぼむ。然どわれらの神のことばは永遠にたたん。」（イザヤ40･8）

そのことはイザヤ書の４０章に書いてある。

「１なんじらの神いいたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。２懇ろにエルサレムに語り之によばわり告げよ。その服役の期すでに終り、そのすでにされたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと。」（イザヤ40･1～2）

イスラエルの歴史で出バビロニヤと共に忘れてはならないのは出エジプト。モーセがエジプトに捕らわれの身になっていたイスラエルの民を半奴隷状態から解放した。これは出エジプトであり、その発端は出エジプト記第３章。出エジプトは患難からの解放。出バビロニヤは罪からの解放。不信の罪に対して捕囚という神罰を受けた。罪と罰。これは法則。イスラエルの民は神罰に５０年服して、エホバの神に許されたわけであります。

エホバがイスラエルの民を選んだのは、彼らが大きな民であったからではない。むしろ小さい民であったから。また、善良だったからではない。頑なな民であったからである。

「神は小さななな仕様がない民を選んだ」

と申命記に書いてある（申命記7･7、9･6）。そういうイスラエル民族がエホバの神さまに選ばれた。

「私はお前の神で、お前は私の民だ」

その約束、選びの実蹟は、モーセに与えられた「十言」によってイスラエルの民はあらわす責任を負わされました。出エジプト記２０章と申命記５章。第一言、

「汝わが顔の前にいかなる神をも神とすべからず」

本当は原文は、

「汝にとってはわが面前には他の神々はないぞ」

という言です。神々はいるんだ、他に。だけれども、

「私の顔の前では、私だけがお前にとっては神だ」

という一対一の人格関係。イスラエルの宗教は拝一神が本質であります。そのようにして、一対一の人格関係で掴みかかられたのがイスラエルの民なんです。だから、

「汝はわが民、われは汝の神」

というのは、正に最初の選びの言なんです。

# ●聖書の体現活現者

イザヤ書４２章１～４節、

「１わがくるわが僕わが心よろこぶわがをみよ。我わがをかれにあたえたり。かれに道をしめすべし。２かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声をにきこえしめず、３まためるをおることなくほのくらきをけすことなく、をもて道をしめさん。４かれは衰えずせずして道を地にたておわらん。もろもろの島はそのをまちのぞむべし。」（イザヤ42･1～4）

これは「エホバの僕」（エーベット・ヤーヴェー）の歌の第一歌です。預言者は神さまが直接語りかけている言を伝えている。これが預言者の言の素晴らしいところなんです。神の言を伝えている。ですから主体は神。預言者は聴き手、伝達者。話しているのは神さま。

「わがくるわが僕」

と神さまが「わが」と言っている。神さまの一人称が主体になっている。

「私だよ、私だよ」

「私が言っているんだよ、私が選んだんだよ」

と言っている。「」というのは主人の言うことを「はい、はい」と言って、聴いて実行する者。師弟、親子、夫婦の関係には、僕的なものが言葉の正しい意味においてあるはずです。それがいわゆる民主主義で大分くずれてしまった。この頃の民主主義というのは大部分身勝手主義です。

「わが心よろこぶわがをみよ。」

「我汝を悦ぶ」という言が、洗礼を受けたイエスの上に天から響いてきたね。

「汝はわが愛しむ子なり、我汝を悦ぶ」

と。それはどういう心境の人に臨んでくるのでしょう。「僕」の姿の人に。

「神さま、あなたの御意が成るように！　あなたの御意をきかせて下さい。私はそれをやりますから、私の心ではありません」

という心境に。これが僕の心。神一切、神全托の態度。自分を開けわたして無者となっている心。キリストは正にこの僕の自覚をもって祈っておられた。キリストの祈りの中心は正に僕の自覚です。だから、イザヤ書の「エホバの僕」をイエスは自分の預言の相として受けとめたのです。イザヤ書は正に「旧約の福音」「隠れたる福音」「福音の土台」といってよい。イエスの一番愛読したのはイザヤ書です。そして特にイザヤ書を身証なさった。イザヤ書の神の言を体現してしまった。分るの分からないのという次元ではない。

皆さんは聖書の活現者と成らなくては。体現活現する。でなければ、聖書を読んだとは言えない。聖書はそれだけの対決を要求している。解るの解らないの、意味がどうのこうのということではない。

「我わが霊をかれにあたえたり。」

極めて重い言がたたみかけてやってくる。旧約的な聖霊が、神さまの霊が与えられた。

「かれに道をしめすべし。」

「道」という語は原文では、いわゆる「デテック」ではなく、「ミシュパーツ」という字で、もともと「審き」という字。法的な言だ。エレミヤ記の５章４節に、

「4故に我いいけるははいやしきなる者なれば エホバのと其神のを知らざるなり」（エレミヤ5･4）

この「エホバのと其神の」の「さばき」がそうなんです。預言者の言は対句になっている。即ち、正邪をハッキリとすることが「道」なんです。正邪善悪をハッキリすることが道。そして正邪善悪をただ頭でハッキリするのではなくて、そこを本当に実存的に生きることがなんです。実践することが道。日本人は道の民。即ち、そういうことが身についているのが道。それが同時に法でもある。「法」という字は三水に去ると書く。水が低きに流れ去るのを法という。自然の姿。漢民族は偉いよ。

# ●聖霊のバプテスマ

そういった意味における神さまの本当の道を示して、しかも、それはこわくない。

「２かれは叫ぶことなく声をあぐることなく

不思議なことが書いてある。ガナリ立てるわけではない。

その声をにきこえしめず、

街頭演説するわけでもない。

３まためるをおることなくほのくらきをけすことなく、

深い思いやりがある。

をもて道をしめさん。

「まこと」「エメツ」、「アーメン」という字が使ってある。「アーメン」という字は、「それが本当であるように」という祈りの言葉。また、「それが本当です」といって祈る時に、「アーメン」と言う。それの名詞が「エメツ」という。「」という字は、「言が成る」と書く。言ったことが必ず成る。これが誠。ヘブライ語の「まこと」は正にこれなんです。ヘブライ人は、実現しないものは誠と思わない。観念的な「真理」ではない。具現するところの真理です。

「我は真理なり」

というのは神の言の具現者である、体現者であるということ。観念的に「本当かうそか」ということではない。あるいは、「まこと」は「」とも書く。本当の事実となる。それを「まこと」という。事実的に道を示す、身証する。する。身証体現する。

だから、聖書というものは、これを読むんじゃない。これは捕まえられること、聞くこと、現ずること。非常に身近なことなんです。魂で聞き、身体で現ずる。そういう世界が聖書の世界で、そういう角度にならなければ聖書は絶対に分からない。

では、いかにしてそれは可能であるか。一時的には可能のような顔をしているよ。パウロは初めはそれを出来ていると思った。ところが、それが大間違いであることが、ダマスコ途上で復活のキリストに霊撃されてわかった。わかったとは、聖霊のバプテスマにあずかったから。イザヤ書の「エホバの僕」は御霊を与えられてエホバの僕となったわけです。それが可能の根源なのです。

「４かれは衰えずせずして道を地にたておわらん。もろもろの島はそのをまちのぞむべし。」

「おしえ」というのは「トーラー」「律法」。神さまの言、指図という意味。

選びの器、選ばれたる者は、このように神の僕にされるわけです。僕にならないで、「選ばれた」と言ったら、とんでもないはなしだ。傲慢になってしまう。イスラエルの民は歴史的に本当にエホバの僕として自覚したらば、えらいことになったんだけれども、

「俺たちは選民だ」

と言って他を見下すようなパリサイになったから、それで散々やっつけられる。大事な福音が隠れているのに、この預言者の言を取り損なっているわけだ。だから、キリストをとうとう迫害し、その先鋒だったパウロもキリストに引っくり返されて、

「目から鱗の如きもの落ちたり」

というわけだ。イスラエル人は、パウロのあの鮮やかな事実を今も受けとらない。「なな民」だね、「うなじこわき民」と旧約にある通り。

あなた方一人びとりが「選び人」ですよ、「エホバの僕」とあなた方が成って下さい。あなた方がそういう選ばれた僕である。

「めるをおることなくほのくらきをけすことなく」

本当のあわれみの心。

「の心なきは人に非ざるなり」

と孟子が言っている。思いやりの心がなければ人間ではない。思いやりを「」という。孔子が言った。恕。一如の心。相手の心の如く成る。漢字のふくみは深いなあ。

神を自主としている人が本当の自主になる。神さまに絶対依存している僕となる時に──自分の心、意志がないところに絶対者の意志が入ってくる──本当の自主自由なんです。自分のいわゆる相対的な自由に死ぬ時に、絶対的な自主が来るんです。これが本当の自由なんです。天法が、天的法則が本当の自由。法則に乗っかって、本当に天衣無縫的な自由な行動をしたのがキリストとお釈迦さん。二大宗教だ、何といったって。

「私たち一人びとりがエホバの僕となれ」

ということ。選ばれたのは僕となることである。僕となったとき、本当に自由である。その内容は何かというと、神の霊が来て、霊人となったから、本当のとなったから。

# ●汝はわが有なり

４２章５節、

「５天をつくりてこれをのべ 地とそのうえのとをひらき そのうえの民に息をあたえ その中をあゆむものに霊をあたえたもう。神エホバかく言い給う。」（イザヤ42･5）

「息」、「気」はヘブライ語の「ネフェシュ」、「ソウル」（英）、「ゼーレ」（独）。「霊」はヘブライ語の「ルーアッハ」、「スピリット」（英）、「ガイスト」（独）。魂、気に聖霊が来ないところに本当の元気はない。エホバに全托する者は鷲の如き者になる。４３章１節、

「１ヤコブよ なんじを創造せるエホバいまいい給う。イスラエルよ 汝をつくれるもの今かく言い給う。おそるるなかれ 我なんじをえり。我なんじの名をよべり 汝はわがなり。」（イザヤ43･1）

これはもう完了ですよ。「お前を贖った」という。罪からの解放、患難からの解放。これが贖いという意味を持つ。患難と罪からの救い出し。だから、出エジプトも出バビロニヤも贖いなんです。身代金で買い取ったりすることも「あがない」です。ホセアもそのことをやった。そして、

「お前の名を呼んでいる」

と。神さまは皆さん一人びとりの名前を呼んでいる。

「汝はわがなり」

「私がお前の主格だぞ、お前は私の客体だぞ」

と。神さまのものになる。神さまの方は有で、こちらは無なんだ。

もうひとつ新約的な言でいえば、ヨハネ伝１５章あたりの言でいえば、

「我汝を愛す」

ということ。キリストの言、

「父の私を愛する如く、私もお前たちを愛する」

という。「なり」ということの内容は「愛しているぞ」ということです。４節、

「４われてなんじを宝とし尊きものとして亦なんじを愛す。この故にわれ人をもてなんじにかえ　民をなんじの命にかえん。」（イザヤ43･4）

「私の宝だ、私の尊いものだ、私は汝を愛している」

と。だけれども、選ばれたことには、使命がある。選ばれたのは、神さまの恵みを伝え、神さまの霊を伝える使命と責任を負わされている。それはまた光栄でもある。

イザヤ書１９章２４～２５節、

「24その日イスラエルはエジプトとアツスリヤとを共にし 三つあいならび 地のうえにてをうくる者となるべし。25万軍のエホバこれを祝して言いたまわく わが民なるエジプト わが手のなるアツスリヤ わが産業なるイスラエルはいなるかな。」（イザヤ19･24～25）

驚くべきことが書いてある。これは終末的な言です。突き抜けています。選びのイスラエルはこのような平和の基となる。福祉のもととなる。そのことはエレミヤ記４章２節にも出ている。

「2かつ汝はとととをもてエホバは活くと誓わん さらば万国の民は彼によりてをうけ 彼によりて誇るべし」（エレミヤ4･2）

イスラエルは万国の福祉のもととなる。聖書の「さいわい」という語は「ハピネス」という字でなく、「グレイス」（英）、「ゼーリッヒカイト」（独）という──「グリュック」「幸福」という字は使わない──恵福、祝福という宗教的な味の語です。この頃、日本で言っているような「」という語ではない。この世的な幸福は浮雲の如くあてになりません。

「我なんじの名をよべり 汝はわがなり。」

神さまに本当に贖いとられて神さまの有になっているから、何もこわいことはない。新約の光で読めば、キリストの贖罪を平伏して受け、キリストと一体一如の現実にあることを信受することになる。

パウロが言っているとおり、

「われキリストの中に、キリストわが中に」

という世界。「エン・クリスト」という信仰的現実であります。

# ●神は原因なり目的なり

４４章１～３節、

「1されどわが僕ヤコブよ わがみたるイスラエルよ 今きけ 2なんじを創造し なんじをにつくり又なんじを助くるエホバ いいたもう わがしもベヤコブよ わが撰みたるエシュルンよ おそるるなかれ 3われ渇けるものに水をそそぎ たる地に流れをそそぎ わがをなんじのにそそぎ わがをなんじのにあたうべければなり」（イザヤ44･1～3）

「水、霊、恩恵」という三つの字が同義語に使われている。即ち、聖霊は水に例えられていて、それは恩恵である。恵みということは、霊を与えられることが恵みなんです。

「6エホバ、イスラエルの王イスラエルをあがなうもの 万軍のエホバ 如此いいたもう われはなりわれはなり われのに神あることなし」（イザヤ44･6）

「我はアルファなり、オメガなり」

キリストがアルファでありオメガである、ということは黙示録に出てくるが、あのように始で終。原因であり、目的である。我々が救われたのも、選ばれたのも、贖われたのも、その原因は神さまの側にあって、こっちにはない。目的も、神の栄光が現われるためであって、その他の何ものでもない。

「始なり終なり」

ということは、

「原因なり目的なり」

ということ。

「創造なり終末の完成なり」

ということですよ。４１章８～９節、

「８然どわが僕イスラエルよ わが選めるヤコブ わが友アブラハムのよ。９われ地のはてより汝をたずさえきたり 地のはしよりなんじを召し かくて汝にいえり 汝はわが僕 われ汝をえらみて棄てざりきと。」（イザヤ41･8～9）

「僕」という言と「選ぶ」という言がいつも出てくる。「選び」の内容は「僕である」ということ、「僕となる」こと、「僕とする」ということ。僕の姿は何ですか。平伏しの姿、無者であることです。

「あなただけです！」

と言っているうちに「あなた」がこの無者の中に入ってくる。僕たる無者こそがキリストにおける自由人、無量人として主の御力が体現してゆくのです。

〔文庫編集者註：この講筵の文章は、著者が録音文字化原稿に編集の手を加えたものであるため、字句の捕捉説明的な文章や、本筋に直接関わりのない多くの副次的脱線的な話は削除されている〕